

日本画「岳麓盛秋」前田千寸 絹本 70.7 × 57.4cm

郷土の画家の作品、日本画「岳麓盛秋」を紹介します。高山の山麓の秋景色と野道の途中に架かる木橋を馬を曳いて渡る人物が描かれています。

作者の前田千寸は、作家芹沢光治良や井上靖に強い影響を与えた旧制沼津中学校の美術教師として知られており、井上の小説「黯い潮」には竹山雨山、「夏草冬濤」には眉田先生として登場しています。

千寸は、高知県香美郡在所村出身で、明治13年(1880)生まれ、明治38年(1905)に東京美術学校日本画科を卒業、山梨県立第二中学校教諭、群馬県大田中学校教諭を歴任、大正元年(1912)9月に旧制沼津中学校教諭となり、図画と国文・漢文を教えました。

昭和6年(1931)12月に51歳で退職し、嘱託教師となって古代色彩研究に力を注ぎ、戦後も講師として昭和31年(1956)3月まで44年間在籍しました。そ

の研究成果は昭和35年(1960)に岩波書店から刊行された『日本色彩文化史』という大著にまとめられました(昭和58年に復刻版刊行)。

市内の庄司美術館には、御子息から寄贈された千寸の作品が所蔵されています。その中に「岳麓の春」と「岳麓の冬」と題された軸装の日本画があり、それらの一連の作品と見られ、「岳麓の春」と構図が類似していますが、そちらには画題のとおり背景に富士山が描かれているのに対して、この作品には違った山が描かれています。

箱書には「故前田千寸先生作之、昭和37年10月20日 舜堂識 落款」とあり、箱に貼られているラベルには「井上家所蔵」ともあります。

箱書にある舜堂は下田舜堂で、旧制沼津中学校、東京美術学校日本画科卒、市内の精華高校などで教鞭を取り、三島市の佐野美術館の初代館長を務めました。

職人昔語り

吉田温泉の杉山節子さん・兼子京子さん
明治時代から続いた沼津最後の銭湯

今のように内風呂が当たり前ではなかった時代、庶民の風呂は専ら銭湯（公衆浴場法における一般公衆浴場）でした。全国公衆浴場業生活衛生共同組合連合会（全浴連）の調べでは、全浴連に加盟する銭湯の数が最も多くなった年は昭和43年（1968）で、17,999軒の銭湯が加盟していました。その後、内風呂の普及が進むにつれて、銭湯の数が減少していき、令和7年（2025）調べては1,562軒となり、昭和43年から90%以上の銭湯が全国の街から消えました。昭和35年（1960）発行の『沼津市商工名鑑』を見ると、当時の沼津市内に17軒の銭湯の名前を確認することができますが、現在は1軒も営業していません。今号は市内の銭湯の中で最後まで営業していた吉田町の吉田温泉のお話です。昭和37年（1962）に吉田温泉四代当主杉山頼氏の元へ嫁いでこられた杉山節子さんと長女の兼子京子さんに昔のお話を語っていただきました。

吉田温泉は杉山竹三郎氏が明治14年（1881）頃に吉田町の地で創業したと伝わっています。明治30年（1897）刊行の『駿遠豆鑑』には、竹三郎氏が営業していた銭湯を確認できます。商号は「富士見屋」とあり、この当時はまだ吉田温泉という名前ではありませんでした（写真1）。ちなみに、「全村（楊原村）新橋」とは永代橋の位置に架けられていた入船橋（明治16年（1883）架橋）のことで、御成橋の位置に架けられていた港橋（明治9年（1876）架橋）に対して新しい橋ということで「新橋」の呼称が用いられています。吉田温泉は現在も「新橋」の位置のそばにあるため、当時の場所とは変わっていないと考えられます。二代は政吉氏で、昭和3年（1928）刊行の『静岡県紳士録』に、「吉田温泉主 沼津市浴場組合長 静岡県浴場連合組合副組合長 杉山政吉」と記載されています。吉田温泉は、大屋根を持った木造の建物でしたが、昭和20年（1945）の沼津空襲により灰塵に帰し、三代竹治氏が昭和25年（1950）にコンクリート造りの建物として吉田温泉を復興させました（写真2）。当時、沼津でコンクリート造りの建物は銀行と吉田温泉だけだったそうで、沼津の復興の象徴として沼津の人たちの希望のともしびとなっていました。復興当時の吉田温泉の浴場の様子は、「芋を洗うように」と表現してしまうほど、大勢の入浴客でにぎわいました。その後、四代頼氏に代が移り、平成28年（2016）に吉田温泉ののれんを下ろしました。

昭和25年に復興した後の吉田温泉は、コンクリート造りの外観もさることながら、銭湯としては珍しい円形の浴槽が採用されていました。男湯と女湯の間の壁に水槽がはめ込まれており、そこでは金魚が飼われているという内装にも凝った造りでした。浴場とその裏手にある休憩場が扉一枚でつながっており、休憩場の利用料金を支払えば、一度湯につかった後に休憩場で休憩し、再び浴場に戻って湯につかることも可能でした。節子さんが嫁いだ当時は、休憩場に寝具が準備されており、宿泊して銭湯を楽しむ客もいました。

吉田温泉では、井戸水を沸かした湯を使用します。カラン（洗い場の蛇口）から出る湯は普通の湯ですが、浴槽へ注がれる湯はヨモギの葉が煮出されており、薬湯としていました。『駿遠豆鑑』に記載されている初代竹三郎氏の業種は「薬湯業」と記載されており、当時の薬湯と成分が同じかはわかりませんが、明治時代以来、薬湯による営業が続けられていました。

吉田町に隣接する市場町や西島町にも銭湯があり、吉田温泉を利用する人は吉田町の人たちが中心でした。内風呂のある家が少なかった当時、吉田町の多くの人たちが吉田温泉を利用しており、吉田温泉は広い湯船につかって一日の疲れをいやす場であると同時に町内の顔見知りの人たちが集まる集会場のような場でもありました。また、一方で、宿泊することも可能だった吉田温泉には、収穫を終えた御殿場や愛鷹の農家の婦人たちや戸田の漁師の団がねぎらいのために長期滞在をすることも珍しくはありませんでした。遠方では山北（神奈川県）から来る人たちもいました。（話：杉山節子氏 昭和14年生・兼子京子氏 昭和38年生）

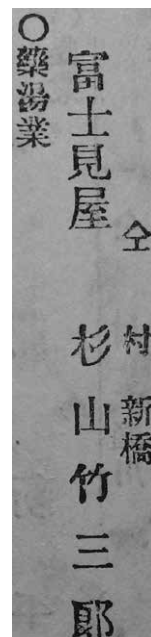


写真1：『駿遠豆鑑』に掲載された初代杉山竹三郎氏（沼津市立図書館所蔵）

写真2：復興後の吉田温泉入口（杉山節子氏・兼子京子氏提供）



『ふるさと沼津覚書』

加藤 雅功

■大岡・金岡編 その5 根方の特徴

●集落の立地基盤 最初に「根方」呼称の成立について触れる。「山の根」から紐解くと、ヤマネ（山麓）と言う地名があり、山際を意味する。「根」は山や麓をも意味し、ネは元「山の頂上」のことだったが、後に山全体を指すようになった。カタは文字通りの「方」の意味で、方角や方向・方位の地名用語や接尾語の例もある。またカタは所・場所の意味から、広がりを持つて方面・地方や地域を指す事例も多い。

ネガタは静岡・山梨方面で用いられており、「山麓地方」を指し、「麓の村々」を言う。一方、地域形成の上ではネガタに対して「ヤマガタ」があり、山の手、山の方面の意である。同様に“対の関係”の地域名称もあり、その事例として、特に沼津地域では「根方」と「浜方」の使い分けがある。ネガタが愛鷹山の山麓部であるのに対し、ハマカタは駿河湾側の片浜から原方面を指し、漁業関係でよく用いられて来た。

次に集落の成立に欠かせない地形と水との関係を見る。根方東部の灌漑水利として、北小林地先の黄瀬川を堰止めた「牧堰」からの引水とともに、補助用水として西寄りの岡一色側に溜池の「門池」があり、大岡地区と金岡地区東部の農地を潤して来た「牧堰・門池用水」の存在がある。北側には愛鷹山の「百沢」の一つで代表的な桃沢川が位置するが、大地形の観点から黄瀬川との合流点以北の山体は特性が大きく異なる。

結果的に「根方」の呼称は愛鷹山の南麓に限定され、黄瀬川沿いの集落形成は南側と違って、連続性を欠く。

愛鷹火山山麓緩斜面には開析谷が刻まれ、数多くの沢が南流しており、沢水が灌漑用水として利用されている。渡戸川等の支谷を塞いで溜池が中世に着工され、北小林から岡一色間に堤を築いた「門池」がある。西側の岡宮から東熊堂間には「松沢」が流れ、小規模な溜池も築堤されて重要な用水として利用されて来た。

●畑作と湧水 根方沿いに特徴的な愛鷹山麓緩斜面と地形遷緩点の関係を確認したい。愛鷹火山の山麓緩斜面には褐色で粘土化の進んだ火山灰層の「愛鷹ローム層」が分布する。腐植土の黒ボク土壌が発達し、今では茶園が広がる開墾地であり、また箱根山西麓と同様に根菜類を中心とした作物栽培に適する。表層の下の降下スコリアを含む火山灰層(ローム層)は粒度が粗く、かつて「不毛の大地」とされたが、戦後にリン酸肥料の施用で「肥沃な大地」に変貌した。なお鍵層である約1.4万年前の休層より下位は、上部・中部・下部ローム層が厚く堆積している。上部ローム層は一般に「赤土」と呼ばれ、多くの降下スコリアの薄層を挟む。

火山灰土壌は腐植や粘土に数mmの「団粒」が著し

く発達しているため、通気性・保水性・排水性に優れている特徴を持つ。畑地が広がる傾斜地の地下への浸透のほか、開析された崖地側からも滲み出した水は、やがて山麓部に集中する。根方街道沿いで、地形遷緩点の傾斜が急に緩くなる部分で浸透した結果、地下水面の浅い崖等の地点で湧水が確認出来る。今では数が少なくなってしまったが、浅井戸の「自由地下水」のタイプである。

一方の「被圧地下水」タイプの掘り抜き井戸は各地に点在するが、元々共同井戸として使用する例が多かった。尾根筋の張り出した埋没部分では地下に不透水層(ローム層)も潜り込んで分布するため、より下位の帯水層へと鉄管で掘り抜いた井戸の利用で、「自噴井」として田地の灌漑に使用する例も最近では増加した。

●集落形態 集落のうちで「集村」は乏水性の台地や扇状地末端等の平地のほか、山麓や丘陵の麓と言った比較的集落の立地条件に恵まれた地点に、家屋が集まって出来た村落である。集村の一形態の「塊村」は根方街道(根方道)や甲州道・箱根裏街道沿いの岡宮・日吉・高田・中石田などで、自然発生的な村落の多くが不規則な塊状の集合を成す。地下水や表層水の得やすい好条件の所で、共同井戸を中心に多く見られる。

一方、列状を成す「列村」では機能や発達の歴史過程、さらには規模により「街村」と「路村」に大別される。集村型のうち1本の道路を挟んで、片側ないし両側に家屋が配列された事例である。道路への依存度が高い「街村」は、旧東海道沿いの平町以西のように、間口が狭く奥行の長い家屋が密集して都市的性格を示し、商業的交通の機能が強く、宿場町などの人為的に作られたものが多い。もう一方の「路村」は、概して自然発生的なもので農漁村に見られ、根方街道や上石田のように道への依存度が低く、家屋配列も粗い。



米軍空中写真 昭和22年10月撮影

皇室ゆかりの地探訪6 毘沙門山とおおひらご 毘沙門山と大平越え

『昭和天皇実録』には川村伯爵別邸や後の御用邸西付属邸に滞在した皇孫殿下の日々の生活の様子が記録されていますが、その中で御運動先として訪れた場所に毘沙門堂とおおひらご 毘沙門山と大平越えがあります。

毘沙門堂とは、下香貫（島郷）字大久保の瓦山の中腹、現在は瓦山神社が建つ場所のことです。

明治34年の『沼津の華』には「毘沙門山の桜花 桃花の名所たる桃郷の東、香貫山の南麓に山あり、毘沙門山と云う。桜花を以て名あり、春風胎蕩の候、桜花の爛漫にして雲を欺き雪を擬するを目せば、人をして恍惚、去るに忍びざらしむ」とあります。

また、明治41年の『沼津公園誌』にも「毘沙門堂 桃郷ノ東、瓦山ノ中腹ニアリ。桜樹数十幹アリ。小嵐峡ト云フヲ得ベシ。又桃郷ノ桃花、紅白爛漫タルノ時、此ノ処ヨリ遠望スル亦可ナリ」とあり、桜の名所でした。

『島郷町史』によれば、毘沙門天は天保7年に郷山の瓦山に勧請されていたが、元禄4年に海岸近くの御林内に勧進されていた伊勢神明宮を瓦山へ移転することになり、それに合祀されることとなった。さらに伊勢神明宮は明治27年に海岸の松林内にあった小祠を合祀して、新たに神殿を建てて瓦山神社となったとされる。

皇孫殿下が訪れたころには既に瓦山神社の社殿の中に毘沙門天は安置され、毘沙門堂はなかったものと見られるが、地元の古老によれば昔は、瓦山神社の場所を毘沙門さんと呼んでおり、毘沙門さんの周りは全て桃の段々畑だったそうである。

現在では、石垣の積まれた段々畑の果樹園は荒廃し、わずかに柑橘類が残されているが、桃樹は見られない。石段は昭和3年に御大典記念として建設されたものであ

り、それまではもっと左の方から登っていたようである。

瓦山神社からさらに山裾を200m程南に向かうと、大平越えの山道の登り口となります。

九十九折りの山道を30分ほど登ると標高175mの志下坂峠に至ります。さらに峠を越えて北に下ると大平の大井の集落へと続いています。静浦と大平から田方方面を結ぶ大切な峠道でした。



下香貫大久保 瓦山神社



志下坂峠

資料館からのお知らせ

資料集及び紀要の刊行について

資料集36「原宮之前植松家文書目録-近世1」及び博物館紀要50を刊行しました。



資料集は帯笑園の旧所有者で、原宿の年寄や愛鷹牧士などを務めた素封家の屋号宮之前的植松家に伝来し、当館に寄託された古文書の目録です。近世文書分を2分冊として、その一部を収録するものです。

沼津市歴史民俗資料館だより

2026.6.25発行 Vol.51 No.1 (通巻250号)

編集・発行 〒410-0822 沼津市下香貫島郷2802-1

沼津御用邸記念公園内

沼津市歴史民俗資料館 TEL 055-932-6266

FAX 055-934-2436

URL: <https://www.city.numazu.shizuoka.jp/kurashi/shisetsu/rekishiminzoku/index/htm>

E-mail: cul-rekimin@city.numazu.lg.jp